
一部50円です

大晦日に食べたクリスマスケーキ



私が初めてクリスマスケーキを食べたのは、大晦日であった。私が小学生の時、年齢離れた兄が就職して初めての暮れに帰郷した時、勤め先の主人が持たせてくれたものだ。

毎年、大晦日が近づくにしたが、我が家は大きな不安におおわれた。それは父の事である。酒を飲むと、酒乱まがいのひと騒動を起こす癖が父にあったからである。まず、出稼ぎ先の京都から無事に帰ってくるかが問題だった。同僚と車で飲み、酔った勢いで何処かで飲みつぶれているのではないかと心配したのである。山奥の我が家には車がないので、遠い駅まで歩いて迎えに行き、つれて帰らねばならない。母と

私には大変な仕事になる。

あのときは、私と母の心配は取越し苦勞となり、その日の夕刻、父は珍しくあまり飲まずに、ミカンの入った箱を持って帰郷した。私はほっとして、これで今年は平穩な正月を迎えられると安堵した。

しかし、兄が夜の9時を過ぎても帰って来ない。父は9時になれば寝る習慣なので兄の帰りを待つことなく寝床についた。祖父も寝て、母と私は今か今かと思ひながら待っていた。家に電話機もなかった時代だ。兄との約束は、夏の盆に交した「正月には帰る」という言葉だけであったのである。「何かの都合で帰れなくなったのかもしれない? もし12時になっても帰って来なかったら寝よう」と母が言った。私は、兄がきっと土産を持って返ってくるはずだ、と思っていたが、汽車がなくなれば帰って来られない。そんなことを思案しながら寝ずに待っていた。

11時過ぎにやっと兄は帰って来た。大きな包みをひろげてケーキを取り出した。私は食べきれないような大きさに興奮した。ケーキを腹一杯食べたいと思っていたからである。その夢がかなうのである。

兄は終電に乗り、駅から雪の山道を、ケーキや私へのおもちゃを大事に抱え急いで帰って来たのである。その年の大晦日は私にとって最高の夜になった。(嘉)



先日、先輩と六甲山でハイキングをした。途中で、再度山から大師道を下った山奥にオシャレなカフェと料理屋があった。カフェに入るとジャズが流れている。さすが神戸だ、オシャレだと驚いた。七十位の気さくな店主は、カフェは一年目ですと説明した。随分贅沢な道楽だと感心した。先輩はおまえも爺捨て山にこんな山小屋をと言っていたが、私が理想とする庵はオシャレな山荘ではない。誰もいない、文明の臭いの無い原始的なものである。助けも呼べない不便極まりない環境下での静寂と自由を味わい、己の感性と直感を自然の中で解放し、生死の有り様を見てみたい、感じてみたい、という好奇心を満足させてくれそうな場所なのである。

先日の検査入院で出た結果は、非常にもろくなくものだった。酒はずーと飲んだらあきません、と医者に宣告された。私は反論しなかったが、無性に情け無かった。私自身に腹が立ったのである。覚悟の上で長年酒を飲んできたのだから、動揺しても仕方がない。飲みたければ飲み、嫌なら飲まなかったらよい。ただそれだけの事であるのだが、「爺捨て山」に籠る事を長年考えてきているが、検査入院の結果に一喜一憂するようないの足らなさが無償に情けなく思ったのである。

しつこいほどに、「姉は人參ジュースで、義兄のガンを退治しようとしている」と書いてきた。去年の冬、大分に湯治に行つたときも、ジュースを車に積んで持って行き、安普請の湯治宿で、ガーガー回転させて、その音に驚いた宿の人が「なにごとか」と飛んで来た、といういきさつも書かせてもらったが、とにかく姉は人の迷惑も顧みず、ひたすら人參ジュースを作り続けた。迷惑している「人」とは、ほかならぬ、義兄だ。なにしろ、飲むべき量がハンパではない。1日3回、毎回300CCつて、真夏の暑い盛りならいざ知らず、飲めますかいなつちゅうのだ。だが、義兄はわが姉の「このまま死なせたたくない！」という痛切な思いは感じ取っていたのだらう、黙って「人參ジュース行」を続けていた。

それが、ある日、どこかでパタリと止まった。姉のヤツ、とうとう飽きてしまったか、と私は思った。

あれだけ必死に続けてきたことなので(周囲に言いふらしていたし)、姉は止めたことをしばらく黙っていた。

あるとき、「もう、人參も止めたしな。

(義兄が) 福島に行くつもりで止めたんや」と、意味不明なことを言つて、それっきりだ。喧嘩でもしたのか、よくわからないのだが、一つ、思い当たるのは、

姉は「あきつばい」ということ。

最初の結婚相手に飽きた(これは、我が家では大きな事件だったが)。子供のころから、情熱的に何か始めては、ぼいっと止めてしまう。

私たちが育つた家はサラリーマン家庭で、家族5人、つましく暮らしていた。だから、ピアノなどは買ってもらえなくて、オルガン。教室には通っていたが、ちっとも上達することなく、いつしかオルガンは知り合いの子供さんにもらわれて行つた。そんな、非音楽一家なのに、姉は自分がOLになって、ボーナスをもらつたら、そのお金でピアノを買つた。もちろん、新品。結構、上等なピアノだった(日本は当時、高度経済成長期。非正規雇用なんて悲しい言葉はなくて、花のOLたちが人生を謳歌

していた)。中途半端なオルガンの技術し

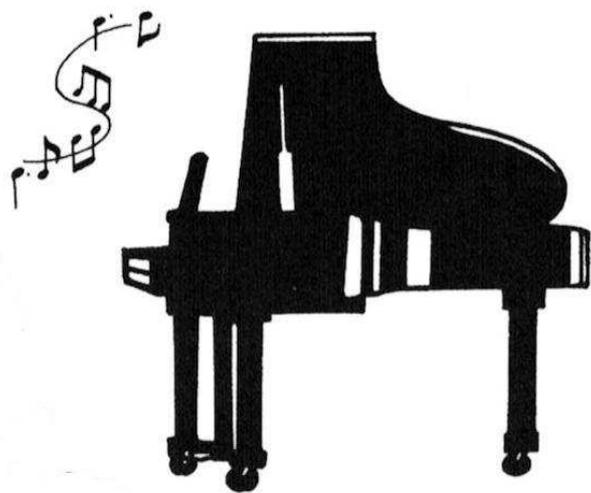
かないのに、ピアノを買つてどうしようというのだ、と思うが、まあ、姉の夢だったのかもしれないし、買うのは勝手だが、問題は、買った途端に姉がピアノに飽きてしまったことだ。「えっ、何でやのん！」と思うが、姉はそういう人なのだ。

ピアノは楽器ではなく、ただの「場所ふさぎ」になつたが、亡くなった父が日曜日にになるとせつせと磨いていた。父は、丁稚あがりのサラリーマンで、身の回りものをきれいにするということを体叩き込まれていて、家中、磨きたがつて、母に半分喜ばれ、半分うとまれていた。その父が、ピアノを大事そうに磨きながら、皮肉交じりに言っていた言葉が「これはうちで一番高い家具やから(苦笑)」。

ピアノ以外の、姉が飽きて投げ出してしまったもの、毛糸の編みかけ等々は押し入れに押し込まれていた。姉は手先が器用というわけではないのに、手芸が好きだった。でも完成させずに途中で飽きてしまうので、母親がぶりぶり文句を言いながら(中学生とか高校生だったので、毛糸やフェルトの布地や刺繍のセットなどを買わされている)、ときどき、押し入れから引つ張り出しては、実用一点張りのものに変身させ、姉の未完の作品の数々に日の目を見させていた。

姉がボーイフレンドのために編みかけセーターは、うちの弟の学校用の座布団になつた(セーターに飽きたのか、ボーイフレンドに飽きたのか、身ごろぐらいいしか編んでいなかったように記憶しているが、編みかけたときの姉は、恋する乙女を絵に描いたような感じで、仕上がりを妄想して、うっとりしていた)。刺繍(クロスステッチというものが流行つてきた段階では、非常に手が込んだゴージャスな薔薇の絵柄のクッションになるはずだったが、母は、ちゃちゃっと最小限のステッチでラインだけのバラの花を刺繍して、クッションカバーに上げた。「放り出すなんて、もったいないことして！」と怒りながら。姉が「飽きつばい」という話を書いたら、延々と続くので、このへんでやめておくが、その姉が昔、私に言つたのは、

「〇子(私の名前)、アンタも子供、産み。私が、今までいっぺんも飽きへんか



けや。子育てはあきへんで」。一人息子が多分、3歳ぐらいのときだったと思う。だが、その一人息子にも、とうとう姉は飽きてしまった節がある。そう、あの嫁がきてからだ。

姉は、「結婚前のジュンちゃんはあるな子ではなかった」と臆面もなく言い、おまけに、「何かといえは、あれ買え、これ買えと、親がお金を出すのは当たり前前と思ってる。父親がガンで、ひよつとしたら余命いくばくもないかもしれへんと言っても知らん顔で、見舞いにもろくすっぽ来えへんかったくせに、自分らの都合だけは押しつけてくる」と、姉のお怒りスイッチは押されたまま。もつとも、義兄の発病前から、姉は嫁が好きではなかった（絶対、本人たちに言わないで下さいよ。これはあくまで、ナイショの実話なのですから）。「あの子はずるいから、嫌いやねん。『手伝おうか』と可愛い嫁のふりして、台所に来るねんけど、自分の子供のビニールのエプロン拭くだけ。夫の手前、私も手伝ってますよとアピールしたいねん。そこへいくと、○美（弟の嫁だ）は、シンちゃん（弟）にそんな気は遣わへんし、体裁をつくらわへんやん、よつぼどええで」。弟の嫁まで引き合いに出して、ブツクサ言う。娘を持つお母さんなら、「そんな恐ろしいことを言うお姑さんのいるところへ、

大事な娘は絶対に嫁にやれない」と思うだろう。でも、ご心配なく。ヤクザにも警察官にも平気でズケズケものを言う私のねえちゃんだが、嫁には言えないし言わない。息子と孫2人、人質を取られているのも同然だから、下手なことを言うわけない。台所でも、多分、「△子（嫁）は、向こうで子供と遊んどいたり」てなことを言っていたに違いない。だから、嫁は洗い物をしなかつただけなのだ、多分。「じゃ、これお願い」と次から次からへと用事を言いつけていけば、嫁だって手伝わないわけにいかかつたはず。でも、それが言えない。だから、ストレスがたま

る。帯状疱疹になったり、ポリープが出来たり。それ、嫁のせいではないでしょう、単に年齢とか、姉の気質、体質、生活スタイルからくるものでしょう、と理性が私にささやくが、姉は私にこうささやく。

「あんな、○子（私）、この前、テレビでやってたけど、ストレスかかると、うんこに出るんだってね。私、△子らと会った後、必ず、うんこが健康的なバナナ状ではなくなるから変やと思ってたけど、やっぱりなあ」。

人参ジュースの話は、一体どこへ行ったしまったのだろう。すみません、次号に続けさせていただきます。

(A O)

汚染される環境と人体⑨ ある元高校教師の悲劇と死 前篇

海彦山彦

2004年4月25日、名古屋市のあるマンションから一人の女性が飛び降り自殺をしました。その人の名前は山内智子さん、当時34歳、夫の名は政治まきはるさん、当時44歳。

常日頃「生きていても苦しい。死んで楽になりたい」と彼女は訴えていた。そしてついに「最後まで私をみつめてくれてありがとう。長い間迷惑をかけてごめんね。さよなら」と言って飛び降りました。

妻の自殺を思いとどまらせようと夫は何度も説得したが、もう止めることはできなかつた。自殺幫助の疑いをかけられた夫は後の裁判で、「絶対に落としてはいけない」と思い妻の両足を支えたが、妻がエビぞりになり持ちこたえることができず、落ちていった」と号泣しながら語った。

彼女に苦しみから死を選ばせた病は化学物質過敏症でした。

自ら通報した政治さんはその場で自殺幫助の疑いを受け、逮捕収監されました。もと家庭教師とその教え子の結婚は、思い止まらせようとしていた夫の目で惨いほどの死別として幕を閉じたのでした。

その事件の数ヶ月後、私は化学物質過敏症支援センターからその事件が朝日テレビの報道ステーションで放送されるとのメール連絡を受けました。早速ビデオに録画して見ました。そこには化学物質過敏症患者間で繰り返される典型的な悲劇が取材されていたのでした。

事件当時、滋賀県の県立高校の保健体育教師をしていた夫の山内さんは誠実な勤務態度で同僚の教師や生徒たちの信頼も厚かつた。

結婚当初から化学物質に過敏だった妻の智子さんの症状は次第に悪化し、殺虫剤や洗濯の洗剤や柔軟剤などに反応して全身の痛みや不眠、湿疹、胸の苦しさなどの様々な症状を起こした。隣近所に香料の不使用の無添加洗剤を使つて頂けないかと交渉したところ、逆に公団に訴えられたこともあった。音に対しても過敏で、公園で遊ぶ子供達に注意しに行った妻を夫が追いかけて止めたこともあったと言う。

安全に住める場所を探して滋賀県から妻の実家のある名古屋の方へと夫婦は5回も転居を繰り返した。そのため勤務地の滋賀県の高校へは往復6時間もかかるようになってしまった。食べ物や衣服も無農薬無添加の高価な有機食品やオーガニック衣料に変えざるを得ず、月々の出費は80万円を超え

た。生活に疲れ始めた夫は憔悴し、鬱病を患うようになった。

政治さんの知人は取材でこう語る「ほんとうにご主人は奥さんに献身的につくしていたと思う。ようつくしはったなと思う。ほんとにようつくしはったと思う」。

化学物質過敏症の診断治療にあたる群馬県前橋市の青山医師は取材でこう語る「患者会で34人に死にたいことがあったか聞きましたが、全員手を上げました。心中しようと子供の首に手をかけた人が4人もいました。みんな死にたいと思っっていますよ。何十回も……」

政治さんは何度にもわたる説得の末、妻の自殺を思いとどまらせていたのです。

この放送でも出所後の放送でも述べられていますが、智子さんには化学物質過敏症の症状のひとつとして攻撃性が出ていました。家の中に刃物の類を置けなかつたと彼は後に語っています。学校の校長に何度も苦しみを相談していましたが、彼の顔や体には幾つもの殴られたあざがあったそうです。智子さんの名譽のために書きますが、それは化学物質過敏症の症状であり、元からそのような性格の人では決してありませんでした。

※有名動画サイト You-Tube で

「Doris Rapp」で検索してみても下さい。アレルゲンの負荷試験で暴言を吐き、「殺してやる」と叫んで暴れる子供の映像が見られます。まさに、ジギルとハイド。

彼は裁判で自殺幇助の罪に問われ、執行猶予付きの3年の判決を下されました。彼は上訴せずこの判断に従いましたが、はたして病苦に苦しみ抜いた彼を裁く権利が裁判所にあるのだろうか。

政治さんが書かれた獄中からの手紙は放送局報道デスクに採用され、その放送として実現しました。彼は早稲田大学時代野球部に在籍し情熱をかけられていました。早稲田100周年の4回生の時には現役監督として早稲田を優勝に導きました。滋賀県時代も野球部の監督として部を県大会優勝に導いています。

事件に驚いた彼を信頼する早稲田のOBや高校の教え子達がテレビ局に何度も賭けあつたようです。

その悪夢から3年ほど経って彼は出所し、サウナの従業員として働きながらブログ「Seiji-Yの憂楽張」開き、化学物質過敏症認知の活動を始めました。(つづく)

※「Seiji-Yの憂楽張」は政治さんが2年前に突然死されたためにそのまま残っております。ご興味のある

方は検索してみてください。また彼が努力されて放送された番組2本や化学物質過敏症の関連ビデオ、そして以前紹介したアメリカ環境医学の「Environmentally Sick Schools」に日本語の字幕をつけています。「芥川だより」発行人の方へDVDに焼いて送りますので来店され是非ご覧ください。

携帯エッセイ 37

禁酒 (2)

禁酒してみても思った。酒は怖い。飲み過ぎて随分、失敗してきた。

学生の頃、下宿で友達と酒を飲んで夜に騒いでいて大家に咎められた。「すみません」と謝るべきところを「うるさい、爺い」と嘔み付いてしまった。今だに反省している。

サラリーマン一年目の頃、酒の席で「オメェー、女いねーだろ」との上司の挑発に乗った。「今から呼びましよう」と夜遅く彼女に電話した。それから二度と彼女は会ってくれなくなつた。

電車で寝過ごししてしばしば乗り過ぎた。神戸から野洲まで行ったことがある。大阪でも、京都でも眼が覚めなかつた。野洲駅の待合室で真夜を明かした。真冬だったので新聞を肌着の下

に巻いて寒さを凌いだ。飲酒運転して電柱にぶつかった。幸い、ゆっくり走り走っていたので車が凹んだ程度で済んだ。

金を盗られこともあつた。「R京橋駅のベンチでうとうととしていて金を抜き取られた。犯人らしき奴を捕まえて鉄道公安官に取り調べて貰つたが出て来なかつた。「あいらは財布を盗んだらすぐに仲間に手渡ししていくので見からない」とのことだつた。

友との酒の席上での口論は枚挙にいとまがない。その挙げ句、何人かは仲違いをし、疎遠になつた。

四十四歳の時、痛風を患つた。あまりたべずに珍味を当てる酒を毎日、飲んで来た。

三ヶ月前には深酒して転倒し、鎖骨にひびが入つた。

ざつと思ひ出したものだけでもこれだけある。

考えてみれば酒は脳を麻痺させるのだから危険な飲み物。

しかし、酒には効用もある。人との付き合いを円滑にする。酒で仲良くなった人も多い。

要は飲み方が大切なのだろう。

そこで「二合までの付き合い酒」に限ることにした。

「ひとり酒」と「晩酌」は止めることにした。《龍》

人間万事塞翁が馬③

片山 義隆

■リスクケアの大切さを実感

妻は私の代わりに新所属署へ挨拶に行くが、当初担当課長は辛辣な言葉で私の休職をせめたてる。針のむしろでじんわり涙が臉一杯になるが、ぐっと堪えていると、同席していた警務課長（署員の福利厚生や署全般に関する係）が見かねて「そんなに言わんでも、片山さんの御主人もなりたくてなったんじゃないんですから」と助け舟。今後の訪問を考えると気が重くなる。

数週間後重い気持ちで署を訪問したが、今回の担当課長は前回言い過ぎたと思ったのか、口調が穏やかで優しくなっていた。

「奥さん何か困った事はありませんか？」との問いかけに妻はつい「主人が生命保険を警察で入っているのだから、これからの入院費が心配です」と本音を言ったところ、課長は私の生命保険の一覧の控えを広げ目を丸くし「お父ちゃん、よっけ入ってるわー！これだけ入ってたら心配ない、奥さん安心しなさい。」と力強く言ってくれ、一日数万円の入院費が出る事が分かり一安心であった。

私は仕事で逃げるのが嫌いで、色々

危ない目もしてきたのでリスクケアを自分なりにしておかなければと、以前から生活を圧迫しない程度に生命保険に入っておいた。

妻は「路頭に迷わずに何とかなる、お父さんありがとう」と尊敬してくれ、たものと勝手に思っている。

妻と娘が三重県の病院へ行く場合は旅館に一泊するが、最初のころは安く浮かすため木賃宿に宿泊したが、もう心配する事無く普通の旅館に安心して泊まれる。

毎週末来られる妻が話してくれ「あーそうだった」と思い出したが、まだ記憶障害が残っていたのだらう。妻の昨夜旅館での少しの贅沢話にも安心した。

■病院での楽しみ

毎週末来られる事で私も訓練の成果を見せようと日々の訓練に励め、成果に喜ぶ家族の顔が嬉しかった。しかし毎週長距離を事故も無く車を運転して来てくれたものだと感謝する。入院での楽しみは家族が来てくれることと、お風呂である。

お風呂はエレベーターで1階に下り、車いすで風呂の順番を待つ渋滞で、10人ずつ更衣室に入り介護士に衣服を脱がせてもらい、風呂用車いすに乗り換え風呂場に入るが、今度は洗う順番

待ち、介護士に体を洗ってもらい、あと車いすに乗ったまま湯につかるが、ここの湯は美人の湯として有名な榊原温泉に隣接する七栗温泉にあり、天然温泉で『ぬるっ』としていて、泉質も良く気持ちのいい湯である。

理学療法では左右に手すりの付いた歩行器の中では手すりを持ちながら歩ける。療法士が「もうそろそろ手すりを頼らずに歩きましょう」と指示するが、手すりから手が離せない。勇気を出して手を離し一歩踏み出すが倒れそうで怖い。健常者の時は思うとおりに自然に足が出て歩けるが、脊髄損傷で神経が切れると、自分の意思で足を上げ一歩一歩足を前へ出さなければならぬ、自然でないし腹筋も無いのでやたらしんどい。健常者にはこの感覚は分からない。

■歩く事のむずかしさを実感

七栗サナトリウムの生活にも馴染んできたところで、担当女医から「片山さんもう首のギブス取りましょう」と告げられた。前の病院で「取ってくれ！取ってくれ！」と喚き散らしていたギブスともついに別れだ。先生に外してもらい、今まで首を覆っていたものが無くなり、頸筋も気持ちがいい気分爽快になったところで、次の目標が出来る。食事・歯磨き・風呂等全て車いすを卒業して自力で歩いて行動している人が数人おり、夕食後も廊下で自主的に歩行訓練に励んでいる姿を病室前で車いすに座り、羨ましく眺めながら早く自分もあのレベルになりたい

理療療法では左右に手すりの付いた歩行器の中では手すりを持ちながら歩ける。療法士が「もうそろそろ手すりを頼らずに歩きましょう」と指示するが、手すりから手が離せない。勇気を出して手を離し一歩踏み出すが倒れそうで怖い。健常者の時は思うとおりに自然に足が出て歩けるが、脊髄損傷で神経が切れると、自分の意思で足を上げ一歩一歩足を前へ出さなければならぬ、自然でないし腹筋も無いのでやたらしんどい。健常者にはこの感覚は分からない。

歩行訓練用介助器具



何日も訓練していると、5歩6歩、次は10歩と歩けるようになるが、手すりがあるから安心して歩けるのである。機嫌良く手すり内を歩行訓練していると「片山さん、もうそこから出て歩きましょう。倒れないようサポートしますから」と河合先生。手すり内から出ようとすると足が出ない、数日間体を支えてもらい歩くが、なかなか上達しない。「河合先生、怖いですね、どうしたら歩けますか？」と言うと「柳は枝が細いけどゆらゆらとして風が吹いても折れる事無いでしょ、肩の力を抜いて体を左右に揺らし腕を大きく振って歩いて見て下さい、倒れる事無いから」とアドバイスをくれたので、肩の力を抜いて体を左右にゆらしながら腕を意識して振り歩いてみると、今までと違い数メートル歩けた。健常者のころ何気なく歩いていた事

ことは無い、今は余計な事考えないで、リハビリ頑張りなさい」と励ましと慰留の言葉をもらい、涙が出るほど感謝したが、今思うと障害者となり困っている者を救済制度があるのに「はいそうか」と辞めさせれる訳は無い。しかし当時私は考えも狭くなっていたのである。

私もそれでは救済制度を利用してもらおうと思うと何か気持ちもすっきりし、リハビリに専念できるようになった。

夕食後も消灯時間の午後9時まで病室前の廊下をひたすら歩く訓練に没頭する。

理学療法のリハビリはジグザグ歩行や障害物を避ける訓練や後ろ向きに歩く訓練もした。

作業療法ではシャツを着る訓練、右手の麻痺がきついで右手から先に袖を通さなければ着れない、また作業療法室には日常生活に必要な訓練用風呂場も設置してあり、取っ手を掴んで風呂に入る座り、上がる訓練までする。

この頃になると不自由な右手に鉛筆を握り、字を書く練習もするが、筆圧があまり無いため健常者の時のような字の癖が無くなった。下手であるが妻に言わせると、今の癖の無い字体の方が読み易いと言う、複雑な心境である。



「芥川」考(三)

『伊勢物語』第六段、鬼一口

大江稚鬼(おおえちつと)

地名の芥川を題材にした話は、佳境にさしかかる。『伊勢物語』の登場である。とはいえ、いきなり本題に入るには、事前の説明が無さすぎる感もある。少し煩わしいが、一応の手順として『伊勢物語』の概要を紹介する必要がある。

日本の古典文学には歌物語と呼ばれる一群がある。和歌を軸にする小話が集められたもので、その代表格が『伊勢物語』である。特定の作家が存在する現代小説とは異なって、誰の手によるかも知られていない。いくばくかの時間をかけて増補された結果、現在の形になったと考えられるのだが、十世紀の早い段階で宮廷社会に広まっていたようだ。百二十五の章段は、「むかし男ありけり」で始まることを基本としているのだが、その主人公らしい「男」が誰なのかは示されていない。それでも古くから在原業平の姿をそこに重ねるのが普通である。業平は『伊勢物語』より半世紀前の人物。六歌仙の一人で美貌をうたわれたが浮き名も多かった。ちなみに親王家に生まれた業平が活躍した九世紀半ばは、藤原良房が権勢を誇った時代である。

概要に続いて、芥川という地名が登場する第六段についての説明が必要になる。煩雑ついでももう少しお付き合いいただきたい。『伊勢物語』は和歌を軸とする小話集である。そこに語られる章段にはいくつものパターンがあるが、展開の上で似通ったものもある。「男」と彼が思いを寄せる「女」、一度は心が通うものの、長くは続かなかつたという話。二人の間にあつた身分差がその結果をもたらすのだが、第四段、第五段、第六段はそうした展開が、それぞれに異なつた風合いで語られている。

第四段では、女が高貴な方の邸へ移される。二度と通うことのできなくなった男が詠んだ歌、

月やあらぬ春や昔の春ならぬ

我身一つはもとの身にして

第五段は築地の崩れに通い路を見つけて忍んでいた男だったが、女の親や兄に見とがめられ、通い路も塞がれる。悲しみに暮れつつ、詠んだ男の歌、

人知れぬわが通ひ路の関守は

宵々ごとにもうちも寝ななん

そして第六段。古くから俗に「芥川の段」とか「鬼一口の段」とか呼ばれてきた章段である。

昔、ある男がいた。身分違いで添い遂げられない女を連れだして逃げたところ、芥川のとりに女が草の上にキラキラ輝く露を指して「あれは何?」と尋ね

た。男はそれに答えず、傍らの茅屋に女を隠し、戸口を守った。しかし、そこは鬼の住処、夜も明けようとした頃、鬼が一口に女を食ってしまった。女の叫びは雷に消されて男には届かない。夜が明け、男はことの次第を知って嘆き悲んだ。男の歌

白玉かなにかと人の問ひし時

露と答へて消えなましものを(真珠?)と尋ねられた時、夜露ですよと答えて、露の如く消えていたら、こんな悲しい目に遭いはしなかったのに)。この話、

実は二条后が後宮に出仕する前、かの男が姫君を連れだした時の話である。藤原基経と国経ご兄弟が妹君を取り返したのだが、それを鬼の仕業と語り伝えたのである……

いくつもトリックが仕込まれた複雑な章段である。歌枕「芥川」を手がかりにして、この章段について考えるのだが、周辺説明ばかりで紙幅が尽きてしまった。次回を先取りして簡単に述べるのなら、歌枕「芥川」に導かれる「飽く」の語感をイメージしつつ、この章段を読んでみると、表面に現れている展開とはまったく違う様相が浮かびあがってくる、ということである。言葉の背後に沈んでしまった、もう一つの可能性が、歌枕のイメージ喚起力によって呼び出されてくる。

永遠なれ！ わだつみのこえ（続）

具志 清

本書の三回目の読書に取り掛かる。昭和二十一年四月二十二日。（中略）

し、余生を社会奉仕のために捧げなければならぬ事である。

前号で、三名の戦没学徒の手記を抄録した。今回は、本書のエピローグに掲載されている手記である。この文章を読むのは実に辛かった。書き移すのは一層辛かった。

その余白に書かれたもの。とある。

この度の私の裁判においても、私は身の潔白を証明すべく私は最善の努力をして来た。しかし私が余りにも日本のために働きすぎたがため、身が潔白であつても責は受けなければならなくなった。

アンダマン海軍部隊の主計長をしていた主計少佐内田実氏は実に立派な人である。氏は年齢三十そこそこで、東京商大を出た秀才である。多くの高官たちの大部分がこの一商大出の主計官

木村久夫。一九一二年（大正七）四月九日生。大阪府出身。昭和十七年四月、

私は死刑を宣告された。誰がこれを予測したであろう。年齢三十に至らず、かつ、学半ばにしてこの世を去る運命を誰が予知し得たであろう。（中略）大きな歴史の転換の下には、私のような蔭の犠牲がいかに多くあつたかを過去の歴史に照らして知る時、全く無意味のように見える私の死も、大きな世界歴史の命ずるところと感知するのである。（中略）

駐屯軍のために敵の諜者を発見した当時は、全軍の感謝と上官よりの賛美を浴び、方面軍よりの感状を授与されようといまでいわれた私の行為も、一ヶ月後起こった日本降伏のためにたちまちにして結果は逆になった。（中略）

か。日本国全体の姿も案外これに類したものでないかと疑わざるを得ない。やはり読書し思索し自ら苦しんで来た者と然らざる者とは、異なる所のあるのを痛感せしめられた。（中略）

九四六年五月二十三日、シंगाポールのチャンギー刑務所にて戦犯刑死。陸軍上等兵。二十八歳

手記は次のように始まる。

この人の手記は、本書の二十四ページ、最長である。紙幅の関係で、中略を多用することになり、この人の魂の叫びが、十分に伝えられない。

この本を父母に渡すようお願いした人は上田大佐である。氏は「カーニバル」の民生部長であつて、私が二年にわたって厄介になつた人である。他の凡ての将校が兵など全く奴隷のごとく扱つて顧みなかつたのであるが、上

死の数日前偶然にこの書を手に入れた。死ぬ前にもう一度これを読んで死に就こうと考へた。四、五年前私の書齋で一読した時のことを想い出しながら、『リンクリート』の寝台の上で遙かなる故郷、

私が来し方を想いながら、死の影を浴びながら、数日後には断頭台の露と消える身ではあるが、私の情熱はやはり学の道にあつたことを最後にもう一度想い出すのである。

私は何ら死に値する悪をした事はない。悪を為したのは他の人々である。しかし今の場合弁解は成立しない。（中略）日本の軍隊のために犠牲になつたと思えば死に切れないが、日本国民全体の罪と非難とを一身に浴びて死ぬと思えば腹も立たない。笑つて死んで行ける。

田氏は全く私に親切であり、私の人格を尊重された。私は氏より一言の叱りをも受けた事はない。私は氏より兵士としてではなく一人の学生として取り扱われた。（中略）

この書に向かっているとどこからともなく湧き出する楽しさがある。明日は絞首台の露と消ゆるやも知れない身でありながら、尽きざる興味に惹きつけられて、

今度の事件においても、最も卑しかったのは陸軍の将校連に多かつた。これに比すれば海軍の将校連は遙かに立派で

う。彼らもやはり日本人なのであるから。しかし一いつっておきたい事は彼ら

は全国民の前で腹を切る気持ちで謝罪

ながら、

比すれば海軍の将校連は遙かに立派で

う。彼らもやはり日本人なのであるから。しかし一いつっておきたい事は彼ら

は全国民の前で腹を切る気持ちで謝罪

こうして静かに死を待っていると、故郷の懐かしい景色が次々から次と浮かんで来ます。分家の桃畑から佐井寺の村を見下ろした、あの幼い時代の景色は、今もありありと浮かんで来ます。谷さんの小父さんが下の池でよく魚を釣っていました。ピチピチと鮒が上がつて来たのを、ありありと思い浮かべます。(中略)

佐井寺は吹田市の一部で、千里ニュータウンの東南端に接し、起伏に富む町である。今や、高層マンション等も建ち並び、大通りが縦横に交叉する都市型の居住区である。以前は広大な千里丘陵の一角を成していた。この人が生まれ育った頃は、緑豊かな丘や水の清らかな池が点在し、静謐な村であったであろう。手記の中で、往時を追憶している。

この人は、高知高等学校を経て京都帝大へ入っている。

次に思い出すのは何といっても高知です。私の境遇的に思想的に最も波瀾の多かった時代であったから、思い出も尽きないものがあります。新屋敷の家、鴻の森、高等学校、堺町、猪野々、思い出は走馬灯のごとく過ぎて行きます。(中略)

孝子に早く結婚させて下さい。私の死によって両親並びに妹が落胆甚しく、一家の衰亡に至らん事を最も恐れます。父母よ妹よ、どうか私の死に落胆せずに、朗らかに平和に暮らして下さい。(中略)

千里の住人である私は、この町を二、三度歩いてみる。この文を書くに際して、先日訪れてみた。歩を進めながら、思った。

この人につながる人々が、この町で幾人か幸せに暮らしているのだろうか。

私の命日は昭和二十一年五月二十三日なり。

もう書くことはない。いよいよ死に赴く。皆様お元気で。さよなら。さよなら。

一、大日本帝国に新しき繁栄あれかし。

一、皆々様お元気で。生前は御厄介になりませんでした。

一、末期の水を上げて下さい。

一、遺骨はどこかない。爪と遺髪とをもつてそれに代える。

そして、短歌九首を詠み、この手記の最後は、次のように終わっている。

以下二首、処刑前夜の作

おのきも悲しみもなし絞首台母の笑顔いだきてゆかむ

風も風ぎ雨もやみたりさわやかに朝日をあびて明日はい出まし

処刑半時間前擱筆す。木村久夫

戦勝国が敗戦国の軍人に対する裁判に関して、今更ながら、論じても仕方がないが、いわゆるBC級裁判の不条理な過程は、戦後、歳月が重なるにしたがって、数多く指摘されてきた。私は、この人の手記を全文読み返して、悲憤の情に耐えられなくなった。

この人は、「戦火に死ななかつた命を、今ここで失うことは惜しんでも余りあるが」「私が敵弾に中つて華々しく戦死を遂げたものと考えて諦めて下さい」と、御両親に書き遺している。

この人は、いにしへの秀逸なる武人の如く、従容として死に對した。華々しく戦死を遂げた軍人と何ら変わらないう。いや、それ以上の、軍人の龜鑑である。

百まで生きる

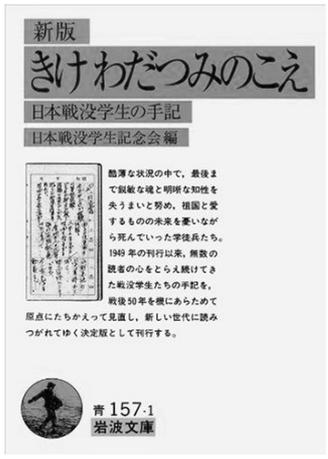
下戸の伯父がビールを飲み、顔を赤くして、肉がえぐれるほど身体を掻きむしっているながらも、「飲んでない」とかたくなに否定する。従兄がいくら問いただしても、知らぬ存ぜぬだ。

従兄は自分の部屋に戻り、嫁は傷の手当てをする。伯父の表情が緩んだところで、従兄の息子が「じいちゃん、ビールうまかった？」と訊くと、ほほえみながら「あんまりうまくなかつたけど、のどが渴いていたんで、ごくごく飲んじやつたよ、ハハ……」とあっさり認めた。

伯父は九四年の人生で、一度だけ酒を飲んだことがある。十五、六のとき、そば屋の四代目跡継ぎとして仕事を始めるときだ。茶碗一杯ほどの酒を、まずいので一気に飲んでしまった。しばらくして身体が熱くなり、目が回って、倒れた。伯父曰く「死ぬほど苦しかった」。それ以来、酒は一滴も飲んでいない。

ボケてそのときの苦しみを忘れてしまったのか、八十年ぶりにアルコールを口にした。その結果、満身創痍になって、息子にしたたか怒られた。それでも、懲りたという様子は伯父からはうかがえない。家の冷蔵庫からアルコール飲料はすべて消えた。

一階は店、二階は三世帯が同居するという配置である。二階には冷蔵庫が二台



備されたこと、人々が大変明るくなったこと（以前は陰気で、無愛想であった）など、訪れた場所がドブロニク、トロギール、スプリットなどアドリア海に面する観光地ということもあるかもしれないが、イタリア、スペインの観光地と比べても全く遜色なしと感じた。

スロベニアはEUに加盟しているので通貨もユーロであったが、クロアチアはボスニアヘルツェゴヴィナとの内戦の影響でEUに加盟できず、通貨もクナのままであるが、お陰で物価が非常に安く、そのうえかなりの数の世界遺産があるので観光地としては大変人気がある。

ところで一九七〇年代のユーゴ以外の東欧諸国での経験を思い出してみた。

ポーランド…当時、ドイツからポーランドへ行くには一旦ウイーンに飛び、オーストリアのポーランド大使館でビザ申請し翌日ワルシャワへ入るのが一般的であった。

他の東欧諸国と同様、商売はすべて公団経由だがポーランドも外貨不足で自転車部品の輸入ライセンスがなかなか下りず、ポーランドのメーカーが西欧諸国に輸出する製品につける部品に限り、輸入ライセンスが下りるような状況だったので殆ど商売にならなかつ

た。耐火煉瓦の原料である海水マグネシアなどは鉄鋼メーカーにとっては必需品であったがL/Cがなかなか開設されず、一方メーカー側は数千トンの荷物をいつまでも抱えていては赤字になるということではらはらせられた。ワルシャワ空港では最低二〇ドルを強制的に現地通貨に替えさせられたが、タクシーやホテル代もドル払いのため現地通貨はほとんど使い道がなかった。道を歩くと闇ドル業者が近寄ってきて公定レートの数倍くらいで替えてくれるのだが、もちろん非合法なので断わるのに往生した。

下世話な話だがホテルにチェックイン、部屋に入ったとたんに二人組の女性を押しかけてきて売春の押し売りをする。その対価もドルであるが一般のサラリーマンの月給一か月分より多いので彼女たちにとっては大変な収入であった。

ハンガリー…今でこそブタペストは日本人観光客も多いが、当時は街中では殆ど日本人は見かけなかったしホテルの数も充分ではなかった。ある時、日本からの出張者とともに何かの展示会に出かけた時、空港で宿を世話してもらうことになり、ある一般人の家に泊まることになった。応接間のような部屋にシングルベッドとソファがあり、私はソファで寝たが同宿の出張

者のいびきが凄くて一晩中寝られなかったのを覚えている。

当時からブタペストは東欧のバリと言われるほど綺麗な町でエリザベス・ブリッジやブタペスト城などが印象に残っており、数年前に女房と観光旅行に出かけ、三十八年ぶりに昔見かけた風景に出会い懐かしい思いがした。ブタペストの一流ホテルには温泉プールがあり湯治で長期滞在する人も多いらしいが、日本人にはぬる過ぎて生暖かい水のような感じであった。ハンガリー人の先祖はフィンランドと同じくマジャール人で東洋人の血が混じっているとのこと、語順も日本語と同じで動詞が最後に来ると聞いた。そのせいか、当時から親日的で私は好印象をもっている。

ブルガリア…たまたま私が大阪支店にいた時に肥料部にいた先輩がソフィア支店の支店長（といっても邦人は一人だけの店）であったので、同氏に頼まれてハンブルグの日本食良品店で買い物をして出張の際に持参した。同氏は関西学院卒、ばりばりの大阪弁で、数少ないソフィアの日本人の中では有名な人であった。ブルガリアは東欧の中でも南端のバルカン半島にあり、経済的にも一番遅れていた。輸出品も農産物が殆どで三井物産はタバコを専売公社に売っていた。東欧の中でも小国であ

り西欧のメーカーでも同国に熱心に売り込みを図るメーカーはいなかったりで、われわれが売り込んだ合成ゴム（NBR）なども東欧のなかでは同国が最初に買ってくれ、量的にもかなりのものであったので日本メーカーに感謝されたのを覚えている。それもソフィア支店長の大阪弁なまりの英語と強引さが効を奏したのかもしれない。ソフィアの町で印象に残っているのはいたるところにローマ時代の遺跡が保存されていることであった。また当時から街頭で売っているアイスクリームが実に美味しかった。

ルーマニア…ブルガリアの隣国ではあるが、親目的ではなく人間的にも私は好きになれなかった。オイルショックの後、世界的に物不足となり、ハンブルグのお客から合成ゴム（SBR）の引き合いがあり同国公団からオッファー受け受注した。納入した商品がやわらかくて変形しているとの、品質クレームが発生し公団と交渉したが頑として値引きに応じない。結局、お客との関係を維持するため当方で損をして解決した。食べ物もブルガリア、ハンガリーなどと比べると大変不味かった。ブルカレスト駐在員の事務所はホテルの一室で住居も同じホテルの隣部屋で職住接近とはいえ、味気ない生活だろうなと同情した。

グチをいわずに「弱音」を吐く

年をとってくると、つまらない話が多くなる。つまり「グチ」であり「弱音」である。

冷静になって聞いていると、グチっぽく話す相手と、自分も同じ「又か」と思う。

上手に弱音を吐く人もあり、かしいなあ、と感心させられる。でも私もこのように頭で考えている時には少しは考えて「グチ」を言ってしまう。こぼし話はダメというより、私はグチと弱音は違うと思うから。

まず身近な友人の中の話しやすい人に、いま自分がつらく思っていることを相手にわかるように話してみる。最近そんなことを思うようになった。たとえ結末が、「グチ」であっても、それをわかってくれるのが友人なのかもしれないと思う。こちらもちよつと考えて、自分なりに素直に弱音を表に出すという気持ちで。

人間はどんな場合でも一人では、生きていけない。自分の弱いところを見せて「力」になってもらう。話すことによって気が落ち着いたら、次には「ありがとう」と礼をいう。

整理ポツポツ

近くの親戚へよくおしゃべりに

行った。グチ話か。小母は耳をかたむけて聞き上手だった。

いつも着物を着て正座していたが、その背後の柵にはぎつしりと箱が積みあげられているのを眺めていた記憶がある。

もうすでに空地になり、モータープールに変化してしまった。台風だ、地震だ、というときのあの風景を思い出す。

今や天井につかえそうになり、ゆらゆら、ときたら全部自分の身体の上に乗っかかってくるのに、私は見かねて「これあぶないよ」と言ったら「何かに使うことがあるかもしれないからよ」という言い分だった。

そして更に時が経ち、あれは空箱ではなく中にはぎつしりと小母の生きた時間がつまっていたのかも知れない。もうとっくに此の世にはいないけれど。

しかし、似たようなことは自分もやっていることに気がついた。

小母の家の居間の柵に積み上げられていた空箱と同じようなものがたっぷりとたまっている。数々のファイル、開けることもないアルバム、中が黄色く変色してしまったノート。

今後役に立つことなど、まずありそうにない数々の品が、小母の家の柵にあった空箱と同じような表情でうずくまっている。

いつ捨ててもいいと考えているだけ

で、身につけてしまったものの整理は困難である。つまり使うこともないから、読む事もないから、といって簡単に捨てられない。

無用だといって捨てたばかりに必要なものが行方不明になる。古い記憶は残っても、新しい記憶はすぐ消える。つまり忘れてしまうのだ。年寄りによる整理は、時には自分自身まで、何を考えているのかを見失いかねる。危うい作業である。

ものを整理し、心を整理すれば、これが「老い上手」の一步だろうか。

俳句

土田 裕

- 数え日や終夜灯ともす官庁街
- 潮入りの離宮の池の浮寝鳥
- 妻の声とみに尖りて年の暮れ
- 短日や灯りてまでの立ち話
- 笹鳴きや走り根多き遊歩道
- 年の暮セシム除染始まれり

晶男

編集後記

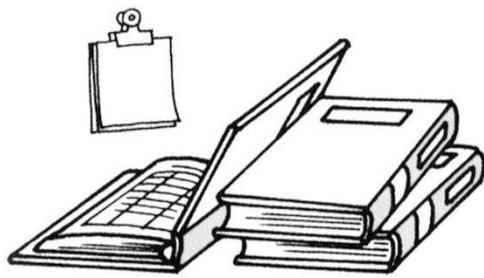
いよいよ今年も年の瀬を迎えます。皆様にとって今年はどうな年だったでしょうか。

先月26日発行の「サンケイリビング」高槻・茨木版で「芥川だより」が紹介されました。

海彦山彦さんの「汚染される環境と人体」の連載が再開しました。ほとんど知られていない化学物質過敏症という病気の実態と深刻さに注目です。「負けるな！ よっちゃん」は休載しました。次号にご期待ください。(嘉)

お知らせ

芥川だより懇親会
2月19日(日)
於、芥川商協会館
11時より



年末年始の休み

12月29日から
1月5日まで休みます
6日より通常営業

着物から服を仕立てます

梵~ほん~